

「ああ…っ、♡」

素肌を撫ぜられる感覚に、少年は身をよじらせた。

卓袱台ちゃぶだいの脚ひたいに額をぶつけそうになり、あわてて頭をひっこめる。

四本の木脚ききやくの向こうから初夏の風が吹いてきて、狭い室内の日めくりカレンダーや花瓶の花をゆらした。

風に運ばれてくる庭先の土の匂い。

それは幾分か湿っぽく、室内は風通しがよいにも関わらず蒸し蒸しとしている。

まだ六月とはいえ、服を脱がされた状態でこの暑さだ。そろそろ扇風機を出さなければかなわないと少年は思う。

「ひ…っ、」

首筋に冷たいものを当てられ、びくんと全裸のからだのの躰そが仰け反ってしまう。

氷だった。

卓袱台ちゃぶだいの木脚ききやくと、畳の上に脱ぎ捨てられた学生服。それらの向こうに、庭に通じるサッシがある。風通しのため数センチ開けられたガラス戸の向こうに、男たちのリヤカーが見えた。リヤカーの前方は自転車と繋がっており、氷屋の彼ら二人は毎日片方が自転車を漕ぎ、片方が走るか荷台に乗るかして氷を売り歩いていた。

今は荷台はからっぽで、今日の配達はここが最後だったのだと見てとれる。

「どう？ ひんやりして気持ちいいでしょ」

氷屋の一人はそう言うと、手にした氷片をつうつと少年の首筋にすべらせてくる。

「……っ、」

たしかにこの蒸し暑さにこれはありがたい。

ほて
火照った首筋にぞくぞくするほど冷たい欠片が滑り落ち、鎖骨にたどり着くより
先に水になる。

少年は常々、この氷というものを自分用に小さく切って手元においてみたいと思っていた。毎日氷屋の二人がリヤカーで配達しにくるそれは、もともと途方もない大きさの氷塊だ。それが売る直前にぎこぎことこのこぎりで重箱ほどの大きさに切りわけられ、少年が触る間もなく家の冷蔵庫の上段に収まってしまふ。少年は前に一度冷蔵庫の上段を開け、べたべたと中の氷を触って楽しんでいたことがある。当然母に見つかり怒られたが、氷を素手で触りたいという気持ちは消えなかった。

「食べてもいいよ」

「！…っ、」

今度はもう片方の男に唇を塞がれた。

口のなかに男の厚い舌と唾液と、小さな氷の欠片が入ってくる。

「んう…、ん……、」

氷片は熱に角^{かど}が溶け、少年の口内に入ってきたときにはすでに丸くなっていた。

少年と男の舌の狭間^{はざま}で、欠片はまたたく間に消えていく。

この家には今、氷屋の男たち二人と少年しかいない。

少年に兄弟はなく、両親はこの日隣町まで働きに出ているということを男たちは知っている。

彼らは二十代前半と思われる若々しい体躯^{たいく}に、白い袖無し襯衣^{しゃつ}を着て、いつも首から手拭いをさげている。

「もう何回目になるのかな。ここにお邪魔するのは」

口づけていないほうの男が何気なく呟いた。

そんなことは少年ももう覚えていない。一年ほど前、ふと留守の母に代わって彼らから氷を受け取った。話の上手い彼らと打ち解けるのに時間はかからず、何

の疑いもせず少年は彼らを家へ招き入れた。

それがまさかこんなことになるだなんて。

あのとき男が何か面白いことを言い、少年は声を立てて笑った。身を^{よじ}振って笑う少年の脇腹にさしいれられた手が、初めは^{くすぐ}擦ってくるだけだったのだが——次第にあらぬ場所に辿り着き、^{たわむ}戯れにしてはあまりに執拗だったのがすべての始まりだ。

「ん……、」

口内の氷はとうに溶けきっている。

しかし男はわずかに残った冷たさをかすめとるように、何度も舌を絡ませてくる。氷の温度がすっかり無くなっても男は少年の舌を解放せず、より一層翻弄するように厚い舌をうごめかせてきた。

「ん” ーッ！」

いい加減息が苦しい。

喉の奥で呻くとうやうやく男は離れ去り、少年は久々に大きく息を吸った。

酸欠のせいかな、頭の芯がぼうっとする。

男たちの手は、飽きることなく少年のあばらや脇腹を撫でてくる。服のみならず下着すら取り払われた肌の上を、男たちの武骨な手が行き来する。

いつしか彼らは家に人がいない日にあがりこみ、ひとしきり少年の話し相手になつた後こうして悪戯して帰っていくようになっていた。彼らは悪戯をしてくる以外は単に優しい、少年にとってのいいお兄さんたちだった。二人と話すのはいつも楽しく、嫌な気になったことなど一度もない。少年宅に人がいない日は家にあげる、あがる、というのが、いつの間にか互いに暗黙の了解になっていた。

「もう反応してるの？」

「…っ、！」

くすりと笑われ、兆しはじめている場所にまで手を伸ばされる。さえぎる物のないそこで、幼い茎が熱を帯びはじめていた。

「！ああ…っ♡」

敏感な先端を指の腹で揉まれ、ぞくりとした痺れが下腹を襲う。

「あ…、あ……♡、んう……っ♡、」

少年の小さなそこを愛でるように、男の指はゆるゆると揉み込んでくる。次第に力仕事の男性らしい、野生じみた力強さも加わってきて、淫靡な疼きが幼茎に

はし
疾りはじめる。

「ああっ…♡♡」

五指に竿を包まれ、やや強めの力で根元から^じ扱きあげられた。

ふふ、と頭上から降ってくるのは、どちらの男の声なのだろう。頭が熱に浮かされたようになって、少年には判断がつかなかった。

「こんなに感じやすくなって……いけない子だ」

「わるい子には、お仕置きが必要だね」

彼らは少年の耳元で囁き、髪を撫でてくる。こんなとき彼らの声はいつも芝居がかっていて、少年を本当に^{どが}咎めたいのではないとわかる。

二人は背格好も喋り方もよく似ている。もしかしたら兄弟なのかもしれなかったが、どちらかがどちらかを「兄さん」と呼んでいるのを聞いたことがない。

「んあ…っ、♡♡」

幼茎をやや粗野な手つきで扱かれていると、その下に息づく場所にもう一人の手が伸びてきた。菊状の窄まりの中心に、男の太い指の先端がめり込んでくる。

「あああ……♡、」

さして痛みもなく、少年のそこは指を受け入れた。抵抗するどころか、むしろ図太い質量を悦ぶように肉環が締め、内壁がさざめき立つ。

「腰、揺れてるよ？」

「♡…っ言わない……で…、」

体内の血がざわめき、男の指を誘い込むように後孔のなかがひくついてしまう。連動して背の下方が畳から浮くほどびくつき、陰部を強調するかのようには腰が前にせり出してしまうのをどうしようもなかった。

「んあ…っ♡あああ……っ♡♡、」

わなわなと震える腰を畳から浮かせたまま、ゆっくりと挿入^{はい}ってくる指を迎え入れる。

「しっかりほぐしておかないとね～」

陽気な声で男は言うが、その指遣いには容赦がない。

「♡あああ…♡ああ…っっ！♡♡」

奥まで突き入れられたかと思うと、いきなりなかの粘膜をぐじゅぐじゅと掻き混ぜられる。

「いやあ…っ、ああ…っ♡♡♡、……っ♡♡」

「ん～？どうしたの。普段俺たちがさんざん犯してるんだもん、痛くないでしょ？」

ぐじゅぐじゅぐじゅっ♡♡♡♡

「あああ…♡♡っひ♡…、あ…♡、♡ゆ…っくり……、ああ…っ♡」

急に^{はげ}烈しく責め立てられて、少年は大きな瞳を涙ぐませて耐えた。

太い指で隘路^{あいろ}を攪拌^{かくはん}され、異物感に肉洞はますます濡れていく。ぬるぬるになったそこを容赦なく行き来されると、肉壁がたまらなく甘い疼きを拾い上げた。

少年に性感を教え込んだのは、言わずもがなこの二人だ。

彼らの手ほどきは回数を増すごとに過激になっていた。

「ああ…♡、あああ…っ♡♡あ……っ♡、」

指を出し入れされるたび、押せば鳴る玩具のように声をあげてしまうのが恥ずかしい。こんな躰にされてしまったことが悔しくもあるが、かといって良い話し相手でもある彼らを、今更突き放す気にもなれない——。

「ああ…っ♡あああ…！、♡」

男を制そうとその逞^{たくま}しい腕に手を伸ばす。しかし立て続けに送り込まれる刺激に躰の力が抜けていく。結果、ただ男の腕に手を添えるだけになってしまって、これではまるでこちらから手淫をねだっているようにも見える。

「♡やめ…っ、いっかい……、や……♡♡ああ…っ♡」

指を二本に増やされた。

「『やめて』？ホントはもっと欲しいくせに」

「！ああああ…っ♡♡♡」

じゅぷじゅぷじゅぷ……っ♡♡♡♡♡

おびただしい水音が鳴り響いた。

先程にも増して、指を烈しく抜き差しされる。淫猥な痺れを間断なく味わわされ、それがつらいはずなのに、肉壁は男の指に一層絡みついている。腿の内側と尻の筋肉とが収縮して、孔内で二本の指を食い締めようとする。

「ほら、ほら。こんなに嬉しそうに絡みついて……」

「いやあ…っ！あ、ああ……っ♡あああ…っ、♡♡！♡」

孔への刺激に気をとられていると、幼茎への手淫が再開される。

「ひ♡♡、い…♡、ああ……っ♡だ……ああっ…♡♡だめ……っあ♡、両方もは……、あああッ♡♡♡」

少年の訴えを聞かず、男は武骨な五本の指で少年の竿を抜きあげてきた。既にしっかりと芯を持っているそこは、男の手にゆっくりと、けれどやや力を込められて扱かれる。根元から搾り取られるような感触に、幼茎の切っ先から透明な蜜がにじむ。

「ひあっ……っ♡あ……っ♡♡ああ……♡っだめ……っもうだめえ…！」